

目的 県立博物館や日本民藝館が所蔵している琉服の単衣(田無、チーゲン)にみられる衿付けの方法(一重の広衿の返衿で、袋縫いによって始末されている)を正統の琉縫いと考えた場合、それ以外のものは、何らかの要因で変化したと考えられる。本研究では、琉縫いがどのように変化してきたかを調べ、その要因が何であったかを考察する。

方法 1985年10月26日、1986年9月14日、11月24日の3日間、沖縄県名護市辺野古と読谷村において、武姓のクディングワの神衣装数点の形態と縫製を調査した。また、1982年4月から1986年8月の間に、古老による聞き取りを行い、縫い方も見せてもらった。

結果 武姓の神衣装では、辺野古、読谷それぞれに変化がみられた。それは、他の個所の縫製と聞き取り、古老の縫い方から総合的に判断して、辺野古の方法から読谷の方法へ移行して行ったと考えられる。両方とも木綿の白で、広幅の布を使用しているところから、明治以降日本本土で広幅の布が出回ったあとのものと考えられる。琉縫いの変化をみると、①正統のもの：衿肩明から衿下りまで衿側だけ袋になり、裏身頃側に一度縫い、二度縫いと二本の縫い目が出る。ぶっかりでは裏側で三角に開く。②辺野古：衿側、裏身頃側に袋ができ、縫い目は一本になる。ぶっかりは開く。③読谷：衿と身頃の縫い代を一緒にして衿付けをする。そのため、衿、身頃、両方が袋になり、ぶっかりの三角が隠れて見えない。変化の要因として、明治12年の廃藩置県、明治32年県令にて女子講習科生徒の服装を琉装から和装に改装させたこと、教育の中への和裁の導入などが考えられる。